

小説集
勤人の休日

椎名麟三





勤人の休日

昭和四十三年七月二十日 印刷
昭和四十三年七月二十五日 発行

五五〇円

著者 椎名麟三

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(20)一一二(大代)
振替東京 八〇八番

(乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。)

印刷・図書印刷株式会社 製本・神田加藤製本所

© 1968 Rinzo Shiina Printed in Japan

勤人の休日

目次

勤人の休日	5
ある献身	55
四人の仲間	93
失踪宣告	113
錆びトタンの刃	161
私の一族	201

装 幀・中 本 達 也

勤人の休日

道を曲ると、もう古びている木筋白モルタル塗りの二階建のアパートが見えた。それがそこにあるというふうだ。この動かしがたい事実がもう彼を打ちのめしている。後悔やら期待やら苦悩やら不安などのこんがらがった感情に、頭中をかきまわされて、もう無表情しかえらぶ道がないことは彼の顔を見れば明瞭だ。それはこの大鉄工所の本社直属の製図係が、あの大きな製図板にかがみ込んでいるときの顔でもなければ、電車の吊革にぶら下っているときの顔でもない。まして一人の利口な（と彼は思っている）小学三年の息子と妻と食卓をかこんでいるときの顔でもない。ただ、大切な金を落してとうとう見つからなかったときの疲れと諦めとのにじんんでいる無表情な顔に似ているといえないこともないだろう。しかし彼がそんな自分の顔に気づくはずもない。この四十になった猫背気味の黒オーバー姿の男は、アパートに近付くと、ちらっと二階の窓を見上げた。その眼は、捨てられた子犬のようなおびえた眼になっている。幸いその窓はしまつて

いた。だが、彼のたずねようとしているのは、二階の部屋ではなく、階下の八号室なのだ。ただその二階のその窓のなかには、戦争で夫を失った口うるさい五十女がいて、日曜日ごとにここへたずねて来る彼に対して、いろんなかげ口を利いているらしいからだ。たまに廊下で出会いでもしようなら、人類の敵でも見るような冷たい、宝石とはいえないが石のような眼で彼をじっと見すえるのである。彼は、自分がそのような人間であり、そのような生活をここで送っているの
で、その非難は当然すぎるほど当然なのだ。しかも困ったことには、便所は階下にあり、流し場も階下にあるというわけなので、たとえ「彼女」の部屋のなかにこもっていても、どうしても廊下に出ずにはおられないときもあるのだ。彼も、人間であるかぎり生理的要求を我慢できないときだであるわけじゃないか。だから廊下は、石の眼に出会う危険にみちている。そればかりかどうかやらあの二階の五十女は、この二十室しかないアパートの人々を、神のスパイのように監視
していて、もし彼女のお気に召さないと、その口うるさいかげ口でこのアパートに居られなくしてしまふのだ。彼は、よく人に頭をペコペコ下げる男だが、彼女に出会ったとき、一所懸命微笑をたたえて、何やら口のなかで呟きながら、二度でいいところを三度、三度でいいところを五度
ペコペコをはずんでやっている。むろんそれに対して彼女は一度も頭を下げたことはない。それは当然のことだが、しかし彼には屈辱と涙を流すほどではないがある情けない諦めが残った。一度は、デパートから贈物をした。金額にすれば大したものではないが、会社を住所にして（家を
自分の住所にできるわけはなかったのだ）、送り主にちゃんと「田中忠夫」という彼の名も書いて
おいたのだ。むろん彼の名も会社も、その五十女はもうとっくにかぎ出して知っているはずなの

に、礼状はおろか顔をあわしたときにも何の挨拶もなかったのである。彼は自分のえらんだ品物が、彼女の氣にくわなかったのではないかと思つたくらい不機嫌だったのだ（彼は、調味料の組合せをおくつたのである）。きく子は、つまり彼が日曜日ごとに通っている当の相手の女だが、彼女は、彼のそんな話を聞いても、例のヒステリックな調子で、「放つときなさいよ、そんなこと！」といかにもほかにもっと考えなければならぬ大切なことがあるだろうといわんばかりの調子で、彼の相談を一言で切りすてた。たしかに彼女との関係において大切なことはありすぎたのであつた。しかし彼は、彼女の部屋にいるときも全く安心してゐることができない状態が苦痛だったのである。しかも室内にガスが一口ついていて、しかも六畳で三千五百円なのだ。いまだきこんなやすいアパートの部屋なんかちよつとないだろう。たとえ他へ移るとしても礼金だとか敷金などで五万の金はいるだろう。彼の経済力ではそんな金はとも都合できそうもない。しかも運のわるいことには、彼女が里の老母にあずけていた前夫の二人の子——それがまだ七歳と五歳の少女なのだ——が、老母が死んで彼女が引取つてしまつてゐるのである。たださえ胃病もちの彼女は、それまでつとめていたバアへも出なくなつて、彼はその彼女たちの生活費だけでも、ふうふういつている始末なのだ。今更、他へ移るなんて考えられないではないか。だが、彼は、たとえ日曜日だけの生活でも、もう少し楽にしたいのだ。廊下にあの五十女の足音がしただけでもびくつくような生活は、全くごめんなのだ。彼は、もう一度、ただ御機嫌をとりたいそれだけで、その五十女の部屋へ重い罐詰の箱をもつていった。彼がその女の部屋を見たのは、それが最初であり最後だった。別に彼の興をそいだというわけではなかったが、そんなことをしても全く

の無駄だということがわかったからだ。表通りに面しているせいか、その六畳の部屋は明るく、質素ながらきちんと片付いていた。彼女は、白い割烹着かつぽうを着て、部屋の真中においた小さな机を前にしながら、外光にピカピカ光る小さな丸いものへ糸を通していた。ビーズ編みの内職をしていたのである。一方の壁にそって重たげに長すぎるジャンパー姿の若い男が自堕落な恰好で腕まくらしで寝ころがっていた。タクシーの運転手をしているという彼女の一人息子らしかったが、その様子はズル休みをしているとでもいった不真面目な感じがその身体全体からにのびていた。彼は、頭をペコペコ下げながらいった。

「どうもいつも御迷惑をおかけして、これつまらないものですが」

五十女は、手もやすめずにじろりと一瞥いちべつをくれただけであつた。残念ながら彼へでなく彼のもつて来たものへである。その様子は、どんなに贈物をしても自分の敵意を解くにはまだ足りないんだぞと思ひ知らせようとでもしているようだった。だからその部屋のドアをしめると思はず彼は心のなかで叫んだものである。

『畜生！ あんな女なんか死んでしまえばいいんだ！』

すると彼は、とても彼女にはかなわない、死ぬとしても自分の方が先で、彼女はいつまでもいつまでも生きて行くだろうという気がして来たのである。

彼は、アパートの玄関にある石段を急ぎ足に上った。彼は、それでもちゃんと無意識にその段の数を数えてしまっている。いつもの通りきっかり四段。彼は、迷信家ではないのだが、四という数を忌むのだ。彼は、製図工なのだ。復員して来てからだから、十八年もその仕事をやってい

る。数字には縁のありすぎる生活なのだが、このアパートへ来るとどうも彼は、迷信家になってしまふようなのだ。いつもいつも（といっても彼がここへ通いはじめてから一年ほどにしかならぬのだが）、いつもきっかり四段。それ以上でもなくそれ以下でもなくきっかり四段。彼は、追われている者のように玄関のガラス戸へ身体ごと打ちあてるようにして押しあける。それは容赦なく軋（き）り音を立てる。ドアの方にしてみれば、自分の物理的自然にしたがったまです。彼は思わず廊下へ眼をやる。暗い空洞のような細長い廊下が、階段の向うまでつづいていて、日曜の朝だというのに人影もなければ、物音も聞えて来ない。きく子の部屋は、その一番奥の左側、つまり八号室なのだ。そのドアまで歩いて二十数歩にしかない距離。それが彼には、これまたいつものように無限の距離に見える。危険が、つまり石の眼がいつ便所や流し元からあらわれて来るかも知れないからだ。だから彼は、そのドアのノックにたどりつくためには、右側に四つ、左側に三つのドアの前を通らなければならないことなど、問題にする余裕なんかで失っている有様なのだ。事実、彼の身体中の筋肉は、危険への予感にもうこわばっている始末なのである。

だが、彼はもう八号室のドアのノックにとりついている。まるで夢見心地で無限の距離を歩いて来たというふうだ。少しばかり非現実感のいりまじった安堵感が彼の心に湧きあがっているが、ただまだ息をはずませていることはかくすことはできない。彼は、ドアのノックをまわそうとして、一瞬、ドアの横の柱に貼りつけてある紙片に眼をとめる。それは清朝の活字で「笠原きく子」とだけ印刷された小さな女名刺だ。彼は、その笠原という姓に他人を感じ、理由のない喜びさえ感じている。彼は、安堵の溜息すら洩らす。そして他人の家を訪れる遠慮ぶかさで、軽く

ノックさえする。しかし彼は、なかからの応答を待たずにノックをまわしている。たしかに笠原きく子は、他人ではあるが、全くの他人ではないからだ。しかも彼は、きく子が不在であることを知っているのだ。昨夜、入院したのだ。間一髪で会社を退勤してしまうところへかかって来た電話でそれを知った彼は、それからの時間をどんな忙しい思いで送ったであらう。彼女を病院へつれて行き、タクシーで借金に駆けまわり、留守番をしてくれる女の人を探しまわり（何しろ二人の幼い子供がいるのだ）、ふたたび病院へきく子をたずねて行かなければならなかった。それは全くの大活躍だった。だが、それは勇ましいものではなく、いまにも泣き出しそうな感じで、実際課長の家へ金を借りに行つて断わられたときは、邸町のひっそりした暗い道を涙を流しながら歩いていたのである。しかもこのことは、数カ月前から予期されていたことだった。彼は、まわりくどくきく子へ堕胎をすすめた。きく子もそれを納得したのだが、彼女の持ち前の不精からか（全くこんな問題に不精をきめ込むなんてありやしないと彼は腹を立てすぎるほど腹を立てて彼女をなじったくらいだった）、あるいは彼女にとつては捕えられたネズミのようにおびえている彼女を見ているのが快かったのか、その実行はのびのびになった。それでも彼女は、近くの産婦人科の医者へ行った。しかしそのときはもう六カ月に入っていて、医者から堕胎をこたわられたのである。彼女のその報告を聞いてから、彼の人生は悲痛なものとなったようだった。彼は、いつも覚悟しなければならぬと考えていたが、何を覚悟しなければならぬのかさっぱりわかっていなかった。もちろん覚悟しなければならぬことは、あれもこれもというふうに思いうかんで来るのだが、最後はとりとめがなくなり、肝腎な一番大切なものといったものは、一向思いうかん

では来なかったのである。で、ある残業で遅くなったホームで国電を待っているとき、危うく線路へとび込もうとしたくらいだったのだ。もちろんその彼に少しばかり勇気の不足していたことは事実だが、これではどこか勘定があわないという気もしたからだ。

だが、ドアからすると部屋へ入った彼は、そのせまいコンクリートの土間へ一瞬立ちつくしていた。上り口のガラスの引戸の向うで、キャッキャッと笑い叫びながらはしゃぎまわっている少女たちの声が聞えたからである。彼は何かをたしかめるように、その右側の三尺ばかりの調理場を見た。錆びたトタンの台の上におかれた、これまたいささか錆びすぎているガスコンロが一つ、役に立たなくなった廃物のようにおかれていたにすぎない。たしかに彼は、ノックしたのだ。しかしそれも聞えないほど二人の少女は、あばれているらしい。たしかにその少女たちは、三ヶ月ほど前にここへ引取られて来た彼には全く赤の他人だった。彼と彼女たちは、口を利いたことさえないのだ。もちろん顔を合わせたことはあるが、それも二、三度にすぎない。彼は、ある大儀さを覚えながらも、他人の部屋をのぞくように引戸の隙間から部屋のなかを見た。

部屋のなかは、さんたんたる有様だった。開かれた押入れからは、赤や青や白などの布地が臍物のように引き出されていた。七歳の少女は、ふだんの彼女と打ってかわって上気しており、五歳の少女は、これまた彼の知っている彼女とちがって、大口をあけてゲラゲラ笑っているのである。そしてうすい、赤と白の織模様セーターを着た二人は、布にちよつと缺はきみを入れてその両端を二人で引張り合う。布は、彼には悲鳴に聞える音を立てて裂け、裂けてしまうと二人はころぶ段取りになる。そのたびに二人は、動物に似た奇声をあげて笑いころげる。何が面白いのか、彼

にはさっぱりわからないが、二人の小さな他人が、遊びの領域を超えた異常な昂奮のなかにいることはたしかだった。それでも彼は、礼儀正しく、お早う、と声をかけてその引戸をガラリとあけた。

事態は、一変した。七歳のやせた姉は、坐り込んだまま恐怖のまなざしでじっと彼の方を見ている。五歳の妹の方は小柄だ。しかしずんぐり太っている。その身体は、ふだんでもいかり肩だが、その肩を一層いからせて、むっとした表情で、姉の傍に立ったまま、天井の一角へ眼をやっている（彼は、姉妹の名を知らなかったし、知ろうともしなかったのだ）。部屋のなかは、まあ、落花狼藉といったところで、引き裂かれた色とりどりの布切れが乱雑に散らばっている。それらの布はきく子の行李のなかにあつたものにちがいないが、彼は偶然一度その行李のなかのおびたらしい布切れを見て、結婚生活やらバア勤めをして来た女の生活の垢あかの堆積といったものを感じたものである。彼は、座敷へ上ろうとしてやめ、その敷居のところへ外交員よろしく腰を下ろした。あくまで厳然と二人の少女と赤の他人という関係を保っていたからだった。二人の少女は、彼にとって余計な存在にすぎない。その彼が、きく子に毎月わたしている一万五千円のお金を（それ以上は彼には到底むりだった、彼は会社では相当するくまわり、下請会社の設計図を内職に引受けていたのだが、月に一万になればいい方だった）、自発的に二万円に引き上げたのは、少女たちを引取ったきく子に対する配慮というよりは、彼の気弱さのせいなのだ。彼は、きく子と関係を生じたその翌日から、何百何千度となく彼女と別れようと決心していながら、いまだに彼女と別れることができないでいるのも、彼女に別段魅力があるからではなく、彼の気弱さとしか